

日英交流150周年 扉が開いたその時

はじめに

話は、1853年まで遡る。近世日本が大きな転換期にさしかかり、鎖国の窓が開け放たれるきっかけとなった2つの事件が起こったその年である。2つの事件とは、皆さんもよくご存じのアメリカ提督ペリーの浦賀来航と、ロシア提督プチャーチンの長崎来航のことである。

江戸幕府が欧米諸国と調印した「和親条約」は対アメリカが最初で1854年3月31日、

◎ 簡易年表（主な出来事）

西 暦	月 日	出 来 事
1853年	7月8日	ペリー浦賀に来航
	8月22日	プチャーチン長崎に来航
1854年	1月3日	プチャーチン長崎に再来航
	2月13日	ペリー再来航
	3月28日	クリミア戦争勃発（英・仏、ロシアへ宣戦布告）
	3月31日	日米和親条約調印
	9月7日	スターリング長崎に来航
	10月14日	日英和親条約調印
1855年	2月7日	日露和親条約調印

対イギリスが同年10月14日で、対ロシアが翌年2月7日であった。今年、日英和親条約が長崎の地で調印されてからちょうど150年の節目の年にあたる。そこで本稿では、イギリスとの条約調印に関してスポットを当て、当時の様子をできるだけリアルに再現してみよう。

長崎での日英交渉

日英和親条約は思わぬきっかけから、長崎の香焼島の沖での交渉がトントン拍子に進み、鎖国後第2番目の条約としては交渉開始から1カ月余りと異例のスピードで長崎奉行所西役所（現在の県庁）において調印されることになる。

（1）黒船来航

1854年9月7日の長崎奉行所の様子はいったいどのようなものだったのか、そこから話を掘り起こしてみることにしよう。

辰の刻（午前8時ごろ）、長崎奉行所水野筑後守が朝の手水ちょうずを使っているところへ、目付の永井岩之丞がセカセカとやって来た。

「申し上げます。ただいま黒船1隻、しかも軍船らしいものが香焼島の大中の瀬戸まで入って参りました」

「また、軍船の推参だな。唐船、蘭船とも予定通りに入港を済ませているから軍船に違いあるまい。今度はイギリスか」

「ご明察の通りと存じます」



西役所跡の石碑（県庁正門付近）

というような2人のやりとりからもわかるように、存外にいたって冷静な感じを受ける。それもそのはずで、その年の3月にはクリミア戦争が勃発し、香港に集結したイギリスの東インド艦隊が、東シナ海から日本海の海域まで、しきりにロシア艦隊を追い回しているという噂をもうこの時代の長崎人はよく知っていたからだ、といわれている。

目付役の番船が香焼の栗浦沖で石火矢を放ちながら偵察してみると、まさしくイギリス艦隊、軍艦1隻（ウィンチェスター号）と蒸気艦3隻（エンカウンター号、バラクータ号およびスティクス号）がユニオン・ジャックの旗印を掲げ、大中の瀬戸にゆっくりと錨いかりをおろしていた。目付助役中村六次郎ら役人たちは艦長室に通され、その中の背の低い、浅黒い男が鮮やかな日本語で話し始めたのには一同驚いた。

「これは、これはお役人さま方お役目大儀に存じます」

「そういうお前はだれじゃ、日本人か」

「いかにも、まぎれもなき日本人。しかし、手前の身柄はただ今、ぶりにや国人別（英国に帰化）に入り、役目は通詞でござる」

「さて、貴艦入港の目的は」

「この軍艦はロシア船を追跡中のもの。日本でいえば、追手船でござる」

早速、通詞オト（乙吉）という日本人の仲立ちでスターリング提督との交渉が始まった。去年のプチャーチンのそれに比べて、装備なども一見して段違いに優れた旗艦で、このスターリングという男もスラリとした優男やさおとこに見えた。

しかし、追手船と聞いてさすがの中村も顔色が変わった。交戦国軍艦の立ち入りを厳重に拒絶するのが、中立国管理者の心得である。このスターリング隊は開戦と同時に、プチャーチン隊を追いかけたが、ペトロパウロスク港に逃げ込んだことがわかった。しかし、その配下のポシエット隊が長崎近海から沖縄辺りをうろついていると見て、これを血祭りにあげようと入港して来たのであった。



英国艦隊入港の様相（四隻の艦船が並んでいる）
出所「描かれた幕末明治」P7より

（2）重大な申し入れ

なにはともあれ、中村はすぐ漕ぎ返して奉行と上役の永井に報告した。江戸表へ早馬や早飛脚が飛ぶ。ノロシもあがった。去年のプチャーチン隊の入港より、港はぐっと緊迫した動きをみせた。当初の入港目的はロシア船の追跡だったスターリングだが、ポシェット隊もまたペトロパウロスク港に無事逃げ込んだとの確報が入り、さぞがっかりしただろうと思いきや、本来江戸へ回航して行うつもりだった開国の申し入れを長崎で行うことに切り替えたのだった。

「改めて貴国に対し、重大な申し入れの命令を受けてきていることを、お伝え申す」

「いずれ、江戸より回訓があるまで相当の日数を要すること。ゆるゆる英気を養って下さい。それよりお国にて何か日本の特産品でも欲しいとのご希望があれば、できるだけご満足のいくように尽力します」

まさに狐と狸の化かし合いである。しかし、「去る3月、アメリカと結ばれた和親条約と同様の条約をこの港で調印したい。江戸湾に入るよりもお互いに長崎の地で交渉した方が円満に事が運ぶのではないか」と主張するスターリングの方がどうも一枚上

手だったようだ。一方、奉行側の対応はというと「こちらは手の内を見透かされているようだし、幕府としても江戸や京、大阪での交渉より、この長崎で交渉を行った方が無用の邪魔が入らなくてよいかもしれない」とまったく弱気であり、再度早飛脚を出している。

(3) 扉が開いたその時

イギリスの当時の新聞記事から、その時を振り返ってみることにしたい。

スターリングが最初に長崎奉行の水野と面会したのは1854年10月4日のこととされている。それからわずか5日後の10月9日には、長崎奉行は將軍からの回答を受け取っていた。それは、英文で書かれた長い一巻の巻物であり、次のように記されていた。(以下、原文を和訳)

「私は長崎の主たる役人に、わが国の法律と利害とが許すような条約を自分の名において締結するように任命した。また、私はオランダ・中国の両国民に限られた特別の商業特権だけは除くが、最恵国により享受せられる全ての便宜をイギリス人に譲与する」

それから、なお5日が条約起草のため費やされた。日本の役人が1日数回も艦上に来て、あれこれ細部にわたって調整を行った。

扉が開いたその時とは、10月14日（嘉永七年八月二十三日）のことである。スターリングが長崎来航後、ちょうど38日目での調印であった。その日の朝、スターリングは以前のように随員を伴って西役所に赴いた。条約は長崎奉行によって読み聞かされ、



江戸時代の西役所全景

午後2時ごろ2通ともに署名を行った。それから、全文が正確であることを確かめるためにオランダ商館に送った後、長崎奉行水野筑後守、目付永井岩之丞がそれぞれ署名を行い、1年以内に批准を行うことで合意した。

条約の内容そのものは次のようにいたってシンプルなものであった(意識)。

- 一、ぶりにたにや国軍船の提督スターリングに対し長崎奉行水野筑後守、目付永井岩之丞は日本国政府の命を受け、燃料、飲用水、食料など船中必要品を用立てる又、破船修理の為に長崎と函館両港にぶりにたにや船が入港する事を許す
- 一、長崎は今からすぐ入港を認める。函館は長崎を退帆してから五十日以上を経て寄港すること
- 一、難風に遭った場合の外、船が破損せずして函館、長崎両港以外の港にみだりに立ち入ってはならぬ
- 一、この後とても渡来する英船がもし日本の法律を犯すことがあれば函館、長崎両港にも寄港を禁ずる
- 一、今度約束した函館、長崎両港以外、今後他の外国船へ寄港を許す港ができれば、その国の船同様、ぶりにたにや船も取り扱う

おわりに

この長崎で調印された条約には、商業貿易についての条項は何も含まれていなかった。しかし英国にとって、この重要な点については以後交渉の機会を持つための道筋は残されており、暴力も脅威もなく目的が達成されたことに意味があるのではないだろうか。また、日本国民にとっては、世界の利害が次々に押し寄せる時代背景の中にあっては、これまでの鎖国という孤立した状況から、「他国民と同様に文明化された慣例の方に向きを変えて進まざるをえなくなった」ことを理解させるきっかけとなったのだろう。

最後に、ひとつのエピソードを紹介して、今回の話を終わりにしたいと思う。

スターリングがビクトリア女王に献上するために奉行に所望した物の中に、日本の狎（チン）のつがいがあった。形もよく白地に少し黒い斑点があって首の周りには赤い絹のケープをしていた。これは、永井が長崎中を探して雌雄十両で買い求めた名古屋産の最良種であった。このチンも長崎でのこの交渉に大きな役割を果たしたのだろう。スターリングはこの可愛いチンに頬ずりをしながら、10月20日、来航から6週間後に長崎を出港した。

(石橋 隆幸)

(参考) 「開港四百年 長崎の歴史」 松浦直治著 株式会社長崎文献社発行
「描かれた幕末明治」 金井圓編訳 株式会社ティビーエス・ブリタニカ発行
(協力) 株式会社阪急コミュニケーションズ 書籍編集部